近代文学研究叢書
第四十一巻

昭和50年5月15日　印刷
昭和50年5月30日　出版

〔¥3000〕

著者　昭和女子大学近代文学研究室

発行者　東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
小林寅次

印刷者　東京都千代田区神田錦町三丁目十四番地
梶原忠幸

発行者　東京都世田谷区太子堂一丁目七番地
昭和女子大学近代文化研究所
振替口座　東京一七〇八六七番
電話代表（422）五一二一番

近代文学研究叢書

第四十一巻

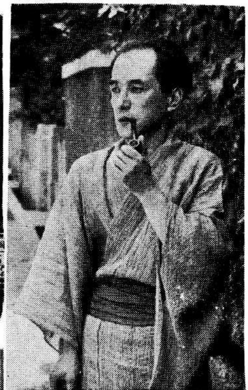
昭和女子大学
近代文学研究室

監

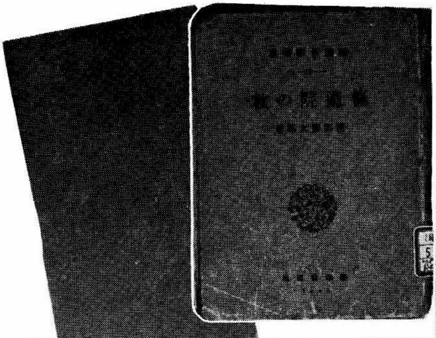
修

池田亀三郎（国文学）
石田貞吉（国文学）
石森延男（児童文学）
上田万年（英語学）
太田善男（比較文学）
岡崎義恵（近代文学）
荻生徂徠（俳文学）
片桐仁（和歌文学）
金子金次郎（国史学）
河野省三（国文学）
木村熊二（英文学）
斎藤倫明（和歌文学）
坂本一郎（英文学）
佐佐木信綱（国文学）
佐藤八郎（英文学）
笹沢美明（独文学）
佐藤清（文法学）
山田孝雄（国文学）
島崎藤村（英文学）
玉井幸助（国文学）
辻村鑑（仏文学）
中島敦（英文学）
内藤濯（比較文学）
成瀬正勝（近代文学）
能勢朝次（国語学）
浜田敏（英文学）
人見圓吉（近代文学）
保坂弘司（英語学）
宮崎三昭（近代文学）
本間久雄（英語学）
村松定孝（国語学）
田中澄夫（国語学）

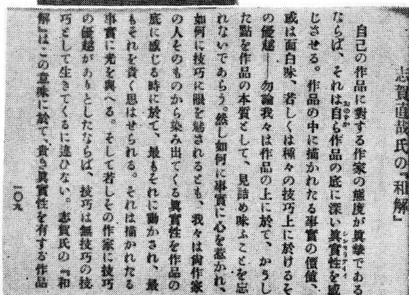
南部修太郎㈠



←肖像（南部董氏蔵）



「修道院の秋」―大正9年1月刊（昭和女子大学蔵）
「返らぬ春」―大正12年4月刊（昭和女子大学蔵）

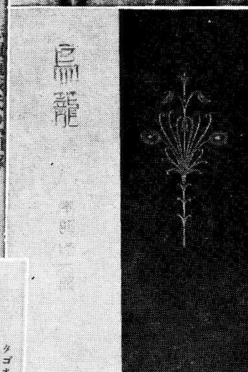


志賀直哉氏の『和解』

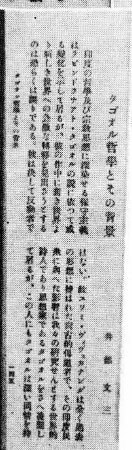
自己の作品に對する作家の態度が眞摯であるならば、それは自ら作品の底に深い眞實性を感じさせる。作品の中に描かれたる事實の價値、或は面白味、若しくは種々の技巧上に於けるその價値――勿論我々は作品の上に於て、かうした點を作品の本質として、見詰め味ふことを忘れないであらう。然し如何に事實に心を惹かれ、如何に技巧に眼を魅されるとも、我々は其作家の人そのものから染み出てくる眞實性を作品の底に感じる時に於て、最もそれに動かされ、最もそれを貴く思はせられる。それは描かれたる事實に光を與へる。そして若しその作家に技巧の價値があるとしたならば、技巧は無技巧の技巧として生きてくるに違ひない。志賀氏の『和解』はこの意味に於て、貴き眞實性を有する作品

一〇九

「志賀直哉氏の『和解』」―「三田文学」―大正6年11月（昭和女子大学蔵）



「鳥籠」―大正14年6月刊（昭和女子大学蔵）

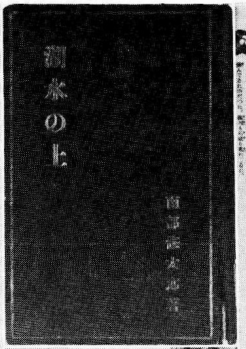


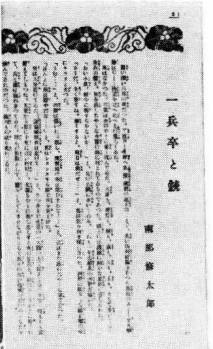
タゴオル哲學とその背景

「タゴオル哲学とその背景」―「三田文学」―大正5年6月
「三田文学」第八巻七号―大正6年7月―南部修太郎編集担当（昭和女子大学蔵）

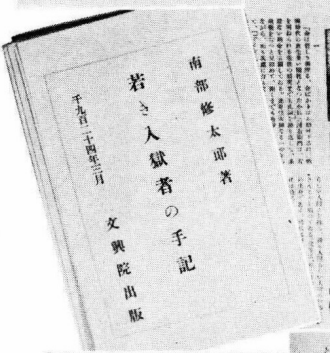
南部修太郎 (二)

「一兵卒と銃」—文章倶楽部（昭和女子大学蔵）大正8年12月
「湖水の上」—大正10年10月刊（昭和女子大学蔵）
「過ぎ行く日」—大正15年7月刊（昭和女子大学蔵）

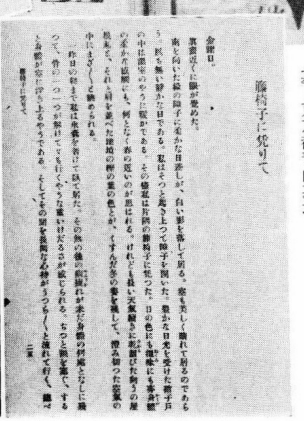




「若草」第二巻一号—大正15年1月（昭和女子大学蔵）
「菊池寛論」—「新潮」—大正8年3月（昭和女子大学蔵）
「若き入獄者の手記」—大正13年3月刊（昭和女子大学蔵）

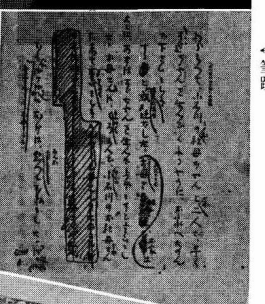


「籐椅子に凭りて」—「三田文学」—大正12年3月（昭和女子大学蔵）
墓—東京都青山墓地

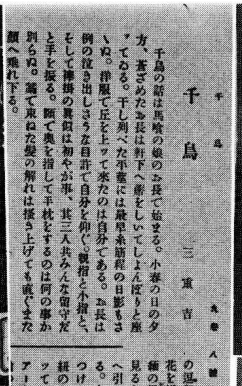


鈴木三重吉 (一)

←肖像



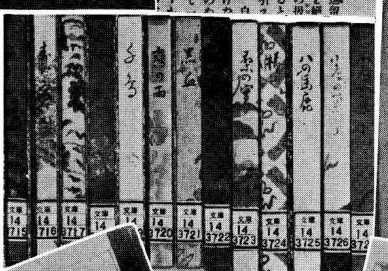
←筆蹟



千鳥

三重吉

千鳥の話は馬喰の娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蓋ざめたお長は軒下へ腰をしいてしょん気りと腕を
ついてゐる。干し列べた不要には最早糸筋程の日影もさゝぬ。律儀で丘を上って来たのは自分である。お長は
例の拉き出しさうな目許で自分と仰ぐ賀狩と小指と、
もしく櫛掛の蒔絵は初やが事、其三人共みんな個守充
と手を振る。陋で奥を指して手枕をするのは何の事か
判らぬ。篤て束ねた髪の解れは掻き上げても眞ぐまた
顔へ乗れて下る。



三重吉全作集
第一～第十三篇
―大正4年2月～
大正5年7月
（昭和女子大学蔵）

黄金鳥

鈴木三重吉主幹

赤い鳥

銀の王妃

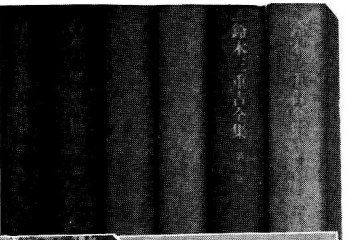
→「千鳥」―「ホトトギス」―明治39年5月号所載
「千代紙」―明治40年4月（昭和女子大学蔵）

↑
「赤い鳥」創刊号―大正7年7月
（昭和女子大学蔵）

黄金鳥（世界童話集第一篇）―大正6年4月―

↑銀の王妃「世界童話集第九篇」―大正7年5月

鈴木三重吉 (二)



鈴木三重吉全集
―昭和13年3月～12月
（昭和女子大学蔵）

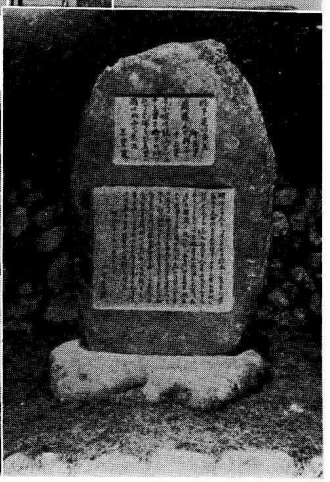
←

↑記念碑―広島市平和公園内

「小鳥の巣」―大正元年11月
「返らぬ日」―明治45年3月
「桑の実」―大正3年1月
（昭和女子大学蔵）

記念碑―広島市児童遊園地

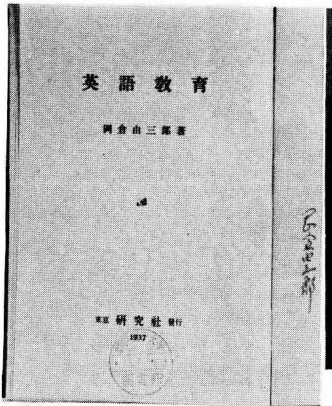
↑墓―広島市長遠寺



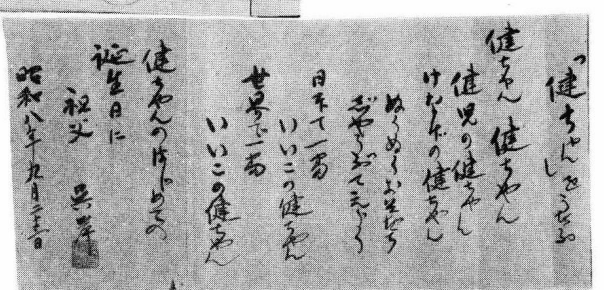
↑文学碑―広島県加計町

岡倉由三郎（一）

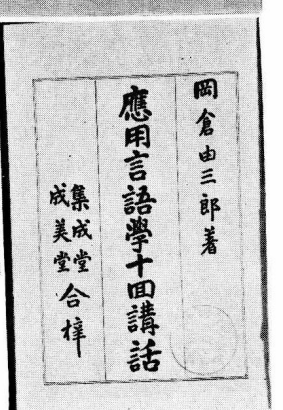
肖像（清水米子氏蔵）

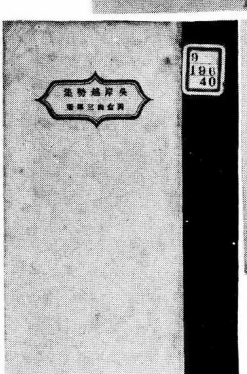


「英語教育」―明治44年10月刊（昭和女子大学蔵）



筆蹟（清水米子氏蔵）

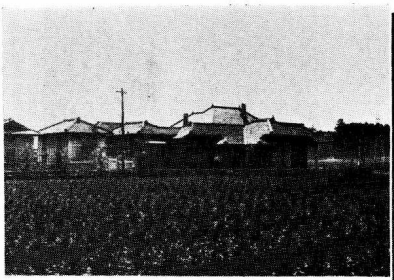


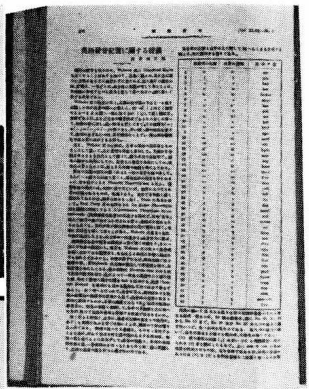


「応用言語学十回講話」―明治35年2月刊（昭和女子大学蔵）
「亡羊」―昭和2年4月刊（昭和女子大学蔵）
「呉岸越勢集」―昭和9年6月刊（昭和女子大学蔵）

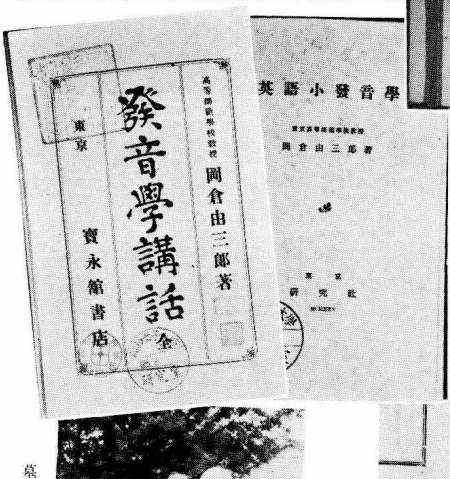
岡倉由三郎 (二)

旧居

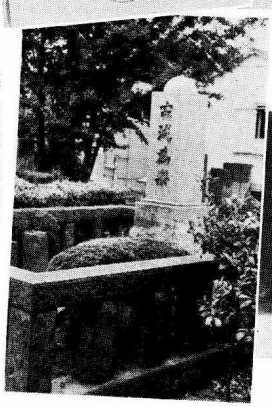




「英語発音記号に関する提議」
―「英語青年」―大正9年7月
（昭和女子大学蔵）



「新撰日本文典・文及び文の解剖」―明治34年3月刊
（昭和女子大学蔵）
「英語小発音学」―大正11年3月刊（昭和女子大学蔵）
「発音学講話」―明治34年11月刊（昭和女子大学蔵）



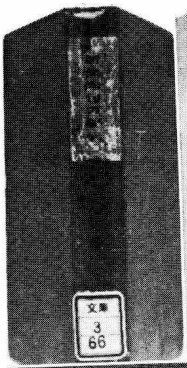
墓―東京都染井霊園

書斎における岡倉由三郎（晩年）

河東碧梧桐 (一)

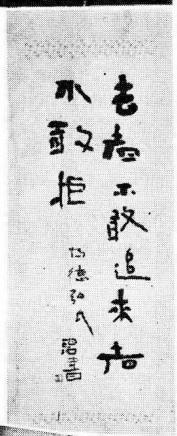
肖像

筆蹟—「去者不敢追来者不敢拒」—
（昭和女子大学蔵）

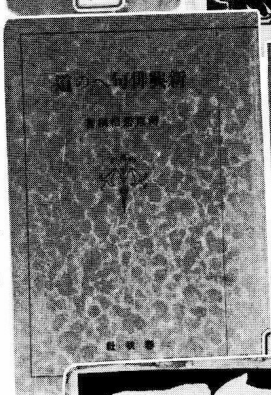


「俳諧漫話」—明治36年11月刊
（昭和女子大学蔵）

「新傾向句の研究」大正4年6月刊
（昭和女子大学蔵）

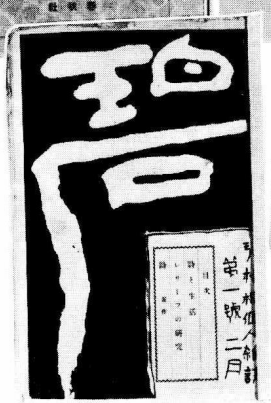


「新傾向句集」—大正4年6月刊
（昭和女子大学蔵）



「新興俳句への道」昭和4年11月刊
（昭和女子大学蔵）

碧—大正12年2月（昭和女子大学蔵）



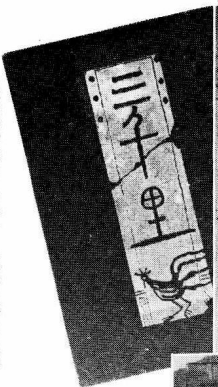
「日本俳句鈔」第弐集上下・巻
—大正2年3月刊—
（昭和女子大学蔵）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

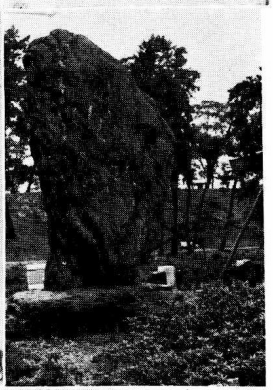
河東碧梧桐㈡

「画人蕪村」—昭和16年3月刊
（昭和女子大学蔵）

「碧梧桐は斯ういふ」—大正6年5月刊
（昭和女子大学蔵）

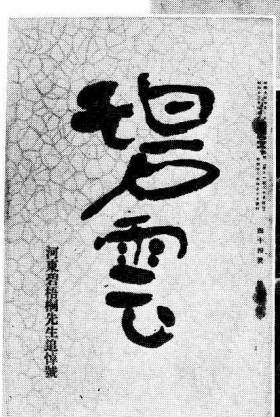


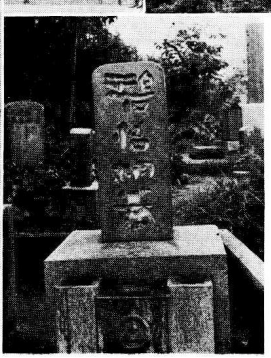
「三千里」—明治41年12月刊
（昭和女子大学蔵）



句碑—愛媛県松山市

「蚊帳釣草」—明治39年8月刊
（昭和女子大学蔵）

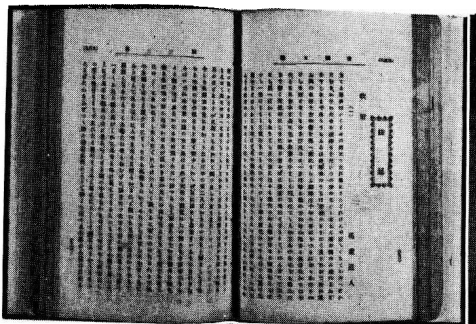




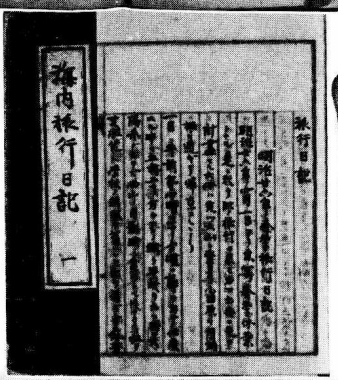
墓—愛媛県松山市朝美町宝塔寺内
「碧雲」碧梧桐追悼号—昭和12年4月
（幡谷東吾氏蔵）
←

淺野馮虚(一)

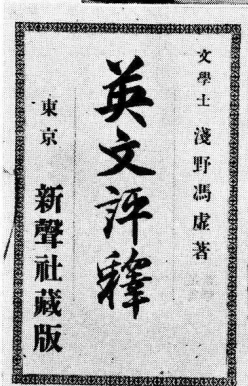
肖像



筆蹟



→「春季旅行日記」の内容の一部と表紙
—明治26年（淺野修一氏蔵）
←「吹雪」処女作—「帝国文学」—明治31年3月（昭和女子大学蔵）



『英文評釋』—明治33年6月
（昭和女子大学蔵）

「散文詩の成立」—「帝国文学」
—明治32年3月
（昭和女子大学蔵）

『英文譯註・奇々怪々』
—明治36年1月刊—
（昭和女子大学蔵）

淺野馮虚(二)

『スケッチブック上』（明治41年5月13版）
『スケッチブック下』（明治34年10月再版）
（昭和女子大学蔵）

『出廬』—大正10年2月（淺野修一氏蔵）

「沙羽全集」（昭和女子大学蔵）
第三巻—明治39年2月（昭和女子大学蔵）
第八巻—明治41年5月（昭和女子大学蔵）
第十二巻—明治42年11月（早稲田大学図書館蔵）

「大正維新の真相」—大正8年11月（昭和女子大学蔵）
「心霊と人生」の一部—（脇長男氏蔵）

「新時代と新信仰」—昭和12年8月（昭和女子大学蔵）
「神霊主義」—昭和9年6月
「心霊読本」—昭和12年8月（昭和女子大学蔵）

「英文学史」—明治40年2月（昭和女子大学蔵）

墓—横浜市鶴見の総持寺

遺品—審神者（さにわ）として使用した石笛と袋—（淺野修一氏蔵）

目次

口絵

第四十一巻の成立……近代文学研究室…（一四）

凡例……近代文学研究叢書編集室…（一九）

南部修太郎……近代文学研究室…（二一）

鈴木三重吉……近代文学研究室…（六一）

岡倉由三郎……近代文学研究室…（一四七）

河東碧梧桐……近代文学研究室…（二三九）

浅野馮虚……近代文学研究室…（三七七）

近代文芸年表(41)……近代文学研究室…（四二九）

巻末付記……近代文学研究叢書編集室…（五〇五）

索引……近代文学研究叢書編集室…（五二四）

第四十一巻の成立

本巻は昭和期第十六巻として、昭和十一年六月から昭和十二年二月までに歿した左記五名の研究調査を収めた。

南部修太郎は小説家。明治二十五年十月十二日、父常次郎、母アキの長男として仙台市に生まれた。父は拓務省技師で架橋の権威者として後に工学博士となった。この父の仕事の関係で一家は東京はじめ各地を転々とした。修太郎は二歳の時神戸で患った気管支カタルが生涯の痼疾のもとになった。東京の芝中学校を経て大正六年、慶応義塾大学純文学科を卒業、「三田文学」の編集主任となる。かたわら東京外語の露語専修科に学ぶ。「修道院の秋」により典雅な格調と清新な気品を認められた。小島政二郎、芥川龍之介、菊池寛らと交わり、「菊池寛論」や芥川龍之介についての評論がある。審美主義、耽美主義的浪漫派の旗じるしを掲げた「三田文学」から巣立った南部ではあるが、彼自身はそれらの主義主張とかかわりなく、中庸を得た端整、典雅な独自の作風を築いた。しかし技巧に凝り過ぎて生気に乏しく、大正十年頃から少女小説風の長短編や評論、随筆が多くなった。代表作『修道院の秋』をはじめ、『鳥籠』『新進作家叢書第二十二篇、南部修太郎集』、少

女小説『月光の曲』、『露草の花』等の他、随筆集『過ぎ行く日』がある。昭和十一年六月二十二日、脳溢血のため死去。

鈴木三重吉は小説家、童話作家。明治十五年九月二十九日、父悦二、母ふさの三男として広島市に誕生、鈴木家はもと浅野藩士であったが、幼時家産が傾き、父は市役所の学務課に勤めた。彼は生まれつき神経質で勝気で乱暴な反面、憂うつなところがあり、講談物などを読みふけった。優秀な成績で中学校を卒業。三高を経て東大英文科に入学した。当時英文科の講師だった夏目漱石に心酔した。在学中胃病と強度の神経衰弱の為一年間休学しその間、親友中川芳太郎の仲介で直接漱石と接するようになり、文学的地固めは著々と進められた。四十一年六月大学卒業後程なく父の死にあい、上京。千葉県成田中学校に教頭として赴任、英語を講じた。しかし多忙な校務に忙殺されて身心をすりへらしその上教員排斥の紛騒があり成田を去った。その後、日比谷の海城中学に職を奉じながら創作に専念、作家生活に入った。この後数年間は最も活躍した時代で、読売、国民新聞、ホトトギス、中央公論、太陽、新潮、新小説、文章世界等に毎月小品を掲載した。又長女の誕生が契機となって童話作りに意欲をもやし『湖水の女』を出版、その他婦人公論にお伽噺「長鼻物語」『唖の王妃』を掲載。『世界童話集』第一篇『黄金鳥』を刊行。以後二十一篇を出版した。大正七年七月、児童雑誌「赤い鳥」を創刊、白秋、藤村、鏡花、秋声、芥川等多数著名作家が寄稿した。昭和四年、経営困難の為廃刊になったが、六年復刊。晩年は童話に心血を注いだが肺臓癌腫の為昭和十一年六月二十四日、五十六歳を以て永眠した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com